

— ジョジョのクリニック日誌 —

… 6～9月分より抜粋 …



■サムラング・ヘルスワーカーのリジャ、ジョジョに代り各コミュニティを訪問

8月6日：6月に続いてラムブソン・コミュニティを再び訪問し、住民にCMBの医療互助制度を説明し参加を呼びかける。
9月25日：モトクリン、ルヒブなど4コミュニティを訪問し、2-14歳の回虫症の子どもたち157名に駆虫剤を与えるとともに、栄養失調の程度を調べるため体重を測定。子どもたちへの駆虫剤投与と体重測定は、すでに6月にも、ダタルサファング、キアミ、アトゥモロックでも実施しています。

■手術、入院支援を受けた住民・子どもたちは10名余り

6月24日：下痢、発熱、脱水症状のアトゥモロック・コミュニティのプリンセス（1歳2ヶ月）に対して入院治療費支援。
7月2日：各種症状が2ヶ月続いていたルヒブ・コミュニティのマルリタ（13歳）は、結核と診断されてジェネラルサントス市立病院（以下GSC病院）に入院。
9月15日：急性胃炎と脱水症のバリテ・コミュニティのベドロ（45歳）、GSC病院に入院。
9月27日：過熟児で通常出産が困難となったキバラ・コミュニティの女性（20歳）、GSC病院で帝王切開により出産。

■CMBスタッフや HANDS奨学生も医療プログラムの対象となっています

6月16日：モンゴカヨのヘルスワーカー・ヒルダ（23歳）が虫垂炎で入院。入院費の一部を補助。
9月24日：奨学生のスペンサーとジミー（ハイスクール4年および1年生）、風邪が長引きクリニックへ。

■もっと早く治療を受けることができれば・・・

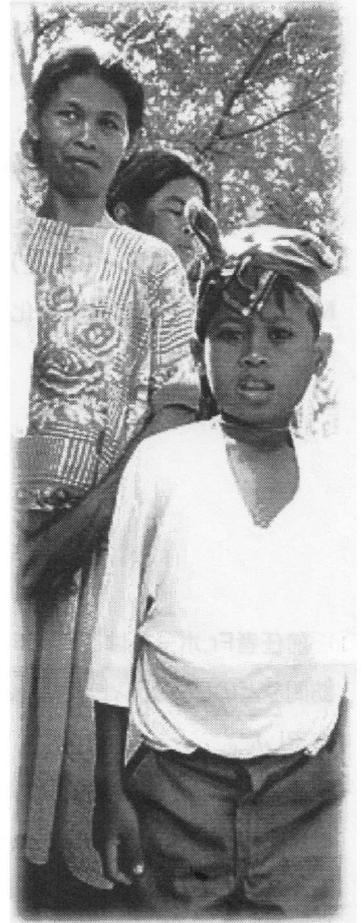
8月17日：2週間近く断続的な発熱と激しい咳の症状があった
キアミ・コミュニティのマルビン（10歳）、
GSC病院に搬送されたが、治療の甲斐なくこの日気管支肺炎で死亡。

■ヘルスワーカーや教師を通じて、コミュニティ用に薬を配布

6月～9月：モンゴカヨ、モトクリン、ダタルサファング、サムラング、ラムブソン、キアミの各コミュニティへ、咳止め・下痢止め・鎮痛解熱剤・抗生物質等を薬草を含めて配布。

■フリークリック（巡回診療）は3回

7-8月：7月には、チボリ町のルヒブとバサグの各コミュニティで、8月にはバンガ町のラムブソンで実施。



— CMBが今、力を入れている医療プログラム —

- ※ 西洋医学だけに頼らない医療を！ —ノビシエートでも薬草栽培始める—
- ※ 医療互助システムの普及を！ —ラムブソン、モンゴカヨでも導入の動き—
- ※ ヘルスワーカーによる衛生、栄養指導の強化 —子どもたちの回虫駆除等—

— コミュニティ報告 —

■今年も盛り上がったボルールのフィエスタ

過去40年間CMB活動の拠点だったボルールに、コミュニティ住民、子どもたちをはじめ、司教やCMBの神父、スタッフ達が集まって、8月15日、民族色に彩られた祭典（フィエスタ）を祝いました。今年3月に40年近い歴史を閉じたCMBボルール小学校の子供たちは、全員がネルミダ公立小学校に移りましたが、彼らのみごとなビラーンダンスや舞踊劇は、民族の誇りを失わないでと願う長老達を、また、民族の伝統を受け継いでいくようにと指導してきた教師達を喜ばせました。

■山のコミュニティに、町のコミュニティが支援を約束

二つの先住民族コミュニティ（モンゴカヨとダタルサファング）に対し、ジェネラルサントス市のオペレロ・バランガイにある町内会SADPが天日乾燥場（Solar Drier）建設支援を約束。

CMBの活動に対する町の共同体による協力申し出は初めてで画期的なこと。SADPIに続く一般市民の協力が期待されます。